ニシン漁と石碑（にしんりょうとせきひ）　鬼脇・沓形

ニシン漁の栄華について、写真や船、漁具などからその隆盛を知ることができますが、一方で荒れた海でも出漁しなければならない状況は多々あり、常に危険と隣り合わせであったことがのこされている石碑から読み取れます。

栄華を表わすものとして、北見神社境内にある句碑「押しか希留　鰊の山や　神乃幸　梅薫」があります。毎春沿岸に押しかけるように獲れたニシンを神様からの恵みであると詠っている梅薫とは、南要吉という人物で、1904（明治37）年に建てられた碑です。

そのような人びとに恵みをもたらすニシンも時として、人命を奪ってしまうこともありました。沓形神居に建つ海難記念碑は、1956（昭和31）年4月17日、強風注意報が発令されているなかで、6隻の起こし船に約180名の漁夫が乗船してニシンの群来を待っていたが、夕方から北西

沓形神居の海難記念碑

北見神社の句碑

からの暴風雨（風速20メートル）に見舞われ、35名が行方不明となる惨事がおきました。漁夫の大半は、青森県八戸市と上北郡大三沢町の人びとで、碑はその追悼のために建てられました。

同様の遭難事故は、石碑や記録に残されていないものも入れれば相当数あったと思われます。ニシン漁ではないものの、石崎の共同寺にはタラ釣り船の遭難碑、鬼脇の大澤寺にはタラバガニ漁船（第壱美保丸）の遭難碑があり、お寺の境内に祀られているケースが見受けられます。